

日本英文学会九州支部第 75 回大会

期日 2022 年（令和 4 年）
10 月 22 日（土）・23 日（日）

場所 西南学院大学
(〒814－8511 福岡市早良区西新 6-2-92)

お知らせ

支部大会開催形態につきまして

2022 年度の第 75 回九州支部大会は、西南学院大学にて対面の形で開催することになりました。ただ、新型コロナウイルスの感染状況が急変した場合、本年度も昨年度と同じように、**Zoom** を用いたオンライン開催となる可能性もございます。その場合はできる限り早く、支部ホームページにて告知いたしますので、そちらをご覧くださいませう、お願い申し上げます。

なお、対面での開催となりましても、感染拡大防止のため、一日目夜の懇親会は開催いたしません。また、開催校の西南学院大学の周辺には、食事のできる店、お弁当を販売しているコンビニ等がたくさんございますので、お弁当の予約販売も今年度は行いません。ご了承くださいたく存じます。

大会直前の状況の急変はないものと切望しておりますが、いずれの形態で開催となりましても、多数のご参加をお待ちしております。

日本英文学会九州支部

〒819-0395 福岡市西区元岡 744

九州大学大学院人文科学研究院

鵜飼信光研究室内

TEL (092) 802-5011

E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com

HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2021-22 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

秋好	礼子	(福岡大学)
鵜飼	信光	(九州大学)
大島	由起子	(福岡大学)
大橋	浩	(九州大学)
加藤	洋介	(西南学院大学)
後藤	美映	(福岡教育大学)
小林	潤司	(鹿児島国際大学)
高野	泰志	(九州大学)
高橋	勤	(九州大学)
竹内	勝徳	(鹿児島大学)
西岡	宣明	(九州大学)
虹林	慶	(熊本県立大学)
福田	稔	(宮崎公立大学)
松元	浩一	(長崎大学)
山田	英二	(福岡大学)

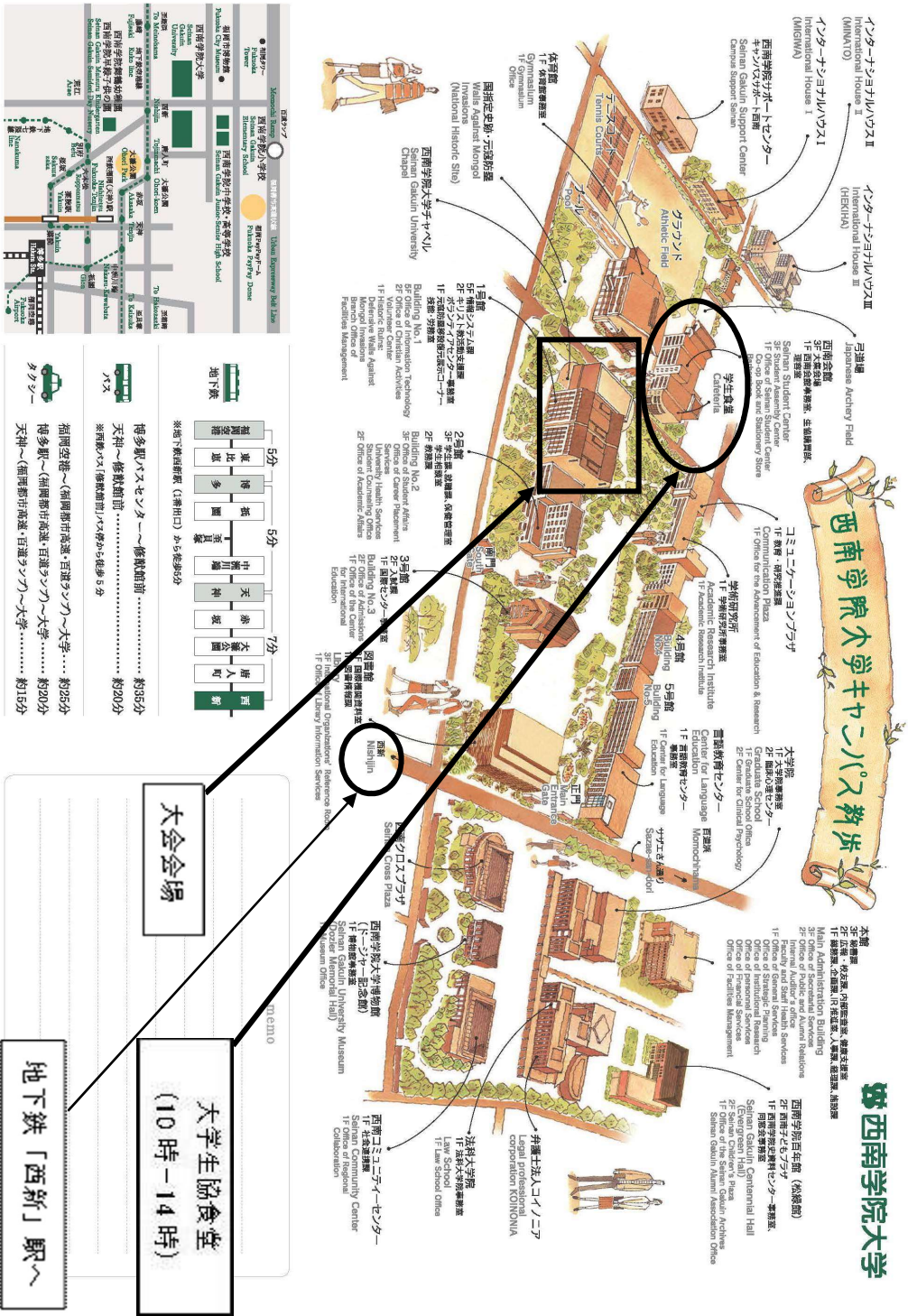
2022 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	鵜飼	信光
副支部長・日本英文学会評議員	西岡	宣明
『九州英文学研究』編集委員長	松元	浩一
事務局長	高野	泰志
書記	大谷	英理果
書記	林	愼将
書記	田中	優子
書記	隈部	歩
書記	田島	健太郎
書記	田中	恵理
書記	浜本	裕美
書記	原田	洋海

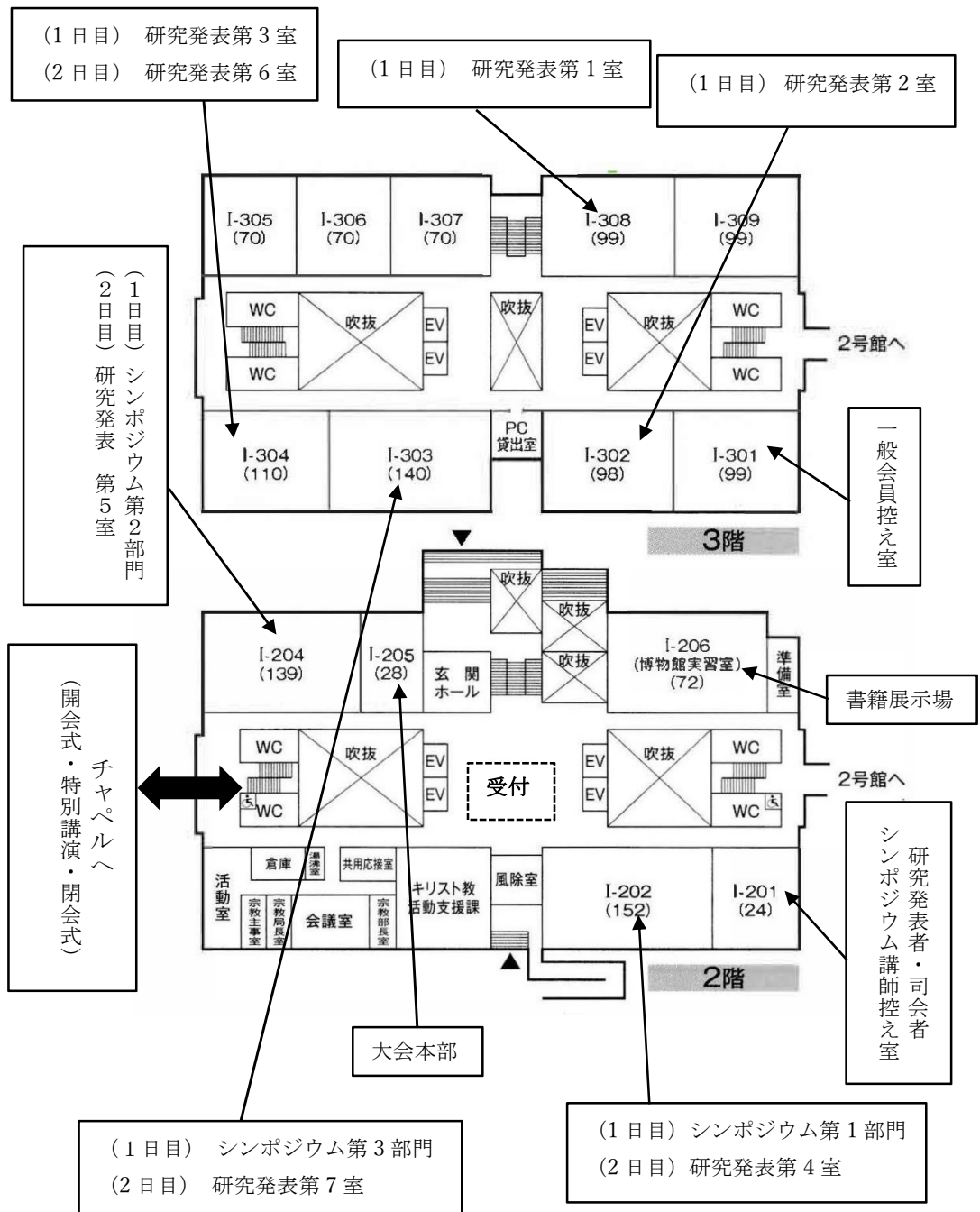
2022 年度 日本英文学会九州支部第 75 回大会 開催校委員一覧

三宅敦子（開催校責任者）、石田由希、一谷智子、加藤洋介、河原真也、藤野功一、リチャード・ホドソン

西南学院大学 キャンパスマップ



会場案内 (1号館平面図)



1-710 : 編集委員会、理事会・評議員会
(エレベーターで7階にお上がりください)

大会本部：205 教室

編集委員会、理事会・評議員会：710 教室

書籍展示場：206 教室

開会式・特別講演・閉会式：チャペル

シンポジウム第 1 部門（イギリス文学）・研究発表第 4 室：202 教室

シンポジウム第 2 部門（アメリカ文学）・研究発表第 5 室：204 教室

シンポジウム第 3 部門（英語学）・研究発表第 7 室：303 教室

研究発表第 1 室：308 教室

研究発表第 2 室：302 教室

研究発表第 3 室：304 教室

研究発表第 6 室：304 教室

発表者・司会者・シンポジウム講師控室：201 教室

一般会員控室：301 教室

今回の大会では、開催校からの要請に従い新型コロナ感染対策を実施することになりました。つきましてはご来場前に以下の対策をお読み頂き、会場到着後に対策の遵守をお願いいたします。

開催校から新型コロナウイルス感染対策に関するお願い

- 1) 学会開催当日に発熱（37.5℃以上）や体調不良等がございましたら、参加をご遠慮くださいますようお願いいたします。
- 2) 大学キャンパス内におけるマスク着用については、以下のとおりです。ご理解とご協力のほどよろしくお願いします。
 - ・屋内：従来どおりマスク（不織布マスクが望ましい）の着用を原則とする。
 - ・屋外：人との距離（2m 以上を目安）が確保できる場合や、距離が確保できなくてもほとんど会話がなない場合は、マスクを着用しなくても良い。
- 3) 学会開催前一週間以内（発表者・司会者）および開催中、そして開催終了後一週間以内（参加者全員）に新型コロナウイルス感染が疑われる状況が発生した場合は、日本英文学九州支部事務局（elsj.kyushu.branch@gmail.com）にご連絡ください。
- 4) 会場への入場に際し検温が必要です。

検温器（消毒液併置）は1号館玄関ホールに通じる入口付近に設置いたします。
当日西南学院大学構内に到着されましたら、掲示の指示に従ってお進みください。

- 5) 発表会場となる教室では、教室番号と着席された机に設置された番号をご自身でお控えください。万一コロナウイルス感染者が発生した場合、必要に応じて会員の皆様へのご連絡に使用いたします。

- 6) チャペル（開会式・特別講演・閉会式会場）では座席指定が必要です。

チャペルの座席は一つおきに着席していただく必要があります。着席可能な座席に置かれた用紙（座席番号は記入済み）に、ご氏名・所属先（非会員の方はご氏名・所属先・ご連絡先）をご記入のうえ、退場の際に出口付近に設置する回収箱にお入れください。

この情報は西南学院大学の新型コロナウイルス感染対策に則り、開催後一ヶ月間の保管が義務づけられていますので、必ずご提出ください。

- 7) 土・日とも昼食は各自ご準備ください。

* 一般会員控え室（301 教室）をご用意いたしますが、感染予防対策の観点から休憩室における茶菓やゴミ袋のご用意はございません。

* 飲み物につきましては、学内に点在する自動販売機をご利用ください。

* 食べ終わった弁当箱などは校舎内のゴミ箱に捨てず、お持ち帰りいただくか校舎外のゴミ箱にお捨てください。

* 土曜日は学内の大学生協食堂や購買店が営業しています（10 時－14 時）ので、ご利用ください。

大会日程

10月22日(土)

開 会 式 (13時10分)

チャペル

研 究 発 表 (①13時30分 ②14時10分)

第1室 (イギリス文学)

308 教室

第2室 (アメリカ文学)

302 教室

第3室 (英 語 学)

304 教室

シンポジウム (15時～17時30分)

第1部門 (イギリス文学)

202 教室

第2部門 (アメリカ文学)

204 教室

第3部門 (英 語 学)

303 教室

懇親会は今年度は開催いたしません。

10月23日(日)

研 究 発 表 (①10時 ②10時40分 ③11時20分 ④12時 ⑤12時40分)

第4室 (イギリス文学)

202 教室

第5室 (アメリカ文学)

204 教室

第6室 (英 語 学)

304 教室

第7室 (英 語 学)

303 教室

特 別 講 演 (14時00分)

チャペル

閉 会 式 (15時30分)

チャペル

日本英文学会九州支部第75回大会プログラム

日 時：2022年10月22日（土）・23日（日）

場 所：西南学院大学（新型コロナウイルスの感染状況が急変した場合、Zoomを用いたオンライン開催となる可能性もございます。その場合はできる限り早く、支部ホームページにて告知いたします）

第1日 10月22日（土）

（受付は正午より1号館2階玄関ホールの内側にて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13時10分より（チャペル）

開会の辞

開催校挨拶

事務局報告

優秀論文賞等選考報告

表彰式

司会・副支部長・九州大学教授	西岡 宣明
支部長・九州大学教授	鶴飼 信光
西南学院大学外国語学部長	和田 光昌
事務局長・九州大学准教授	高野 泰志
編集委員長・長崎大学教授	松元 浩一

研究発表（①13時30分 ②14時10分）

第1室（308教室）

1. Sewing up Separated Spheres: Charlotte Brontë's Vision of Feminist History in *Shirley*

司会 北九州市立大学准教授 濱 奈々恵

九州大学大学院博士課程 Yin Yimeng

【招待発表】

2. 自伝的小説としての『チャンス』

司会 福岡女子大学教授 宮川 美佐子

長崎県立大学教授 岩清水 由美子

第2室（302教室）

【招待発表】

1. 「ブランチは女です。まず、女を舞台に出してください」——*A Streetcar Named Desire* 日本初演における杉村春子のジェンダー・パフォーマンス

司会 鹿児島大学教授 竹内 勝徳

福岡大学准教授 坂井 隆

2. Truman Capote, *Other Voices, Other Rooms*, における境界線の解体——規範と分類の曖昧性

司会 九州国際大学教授 大園 弘

九州大学大学院修士課程 山口 沙瑛

第3室 (304 教室)

1. 否定と A 移動の再構築

司会 宮崎公立大学教授 福田 稔

九州大学大学院博士課程 久保田 舞

2. 副詞効果考察

司会 福岡工業大学教授 宗正 佳啓

九州大学大学院博士課程 高場 清子

シンポジウム (15 時～17 時 30 分)

第1部門「イギリス文学」(202 教室)

『ユリシーズ』の何がすごいのか——革命性とヒューマニズム

講師	熊本高等専門学校准教授	岩下 いずみ
講師	宮崎産業経営大学准教授	安井 誠
講師	熊本保健科学大学准教授	田中 恵理
司会・講師	宮崎大学准教授	新名 桂子

第2部門「アメリカ文学」(204 教室)

戦争に周縁はあるのか？

司会	九州大学准教授	高野 泰志
講師	九州大学助教	永川 とも子
講師	福岡県立大学教授	田吹 香子
講師	明治大学准教授	山本 洋平

第3部門「英語学」(303 教室)

統語論と言語学関連分野とのインターフェイス

司会・講師	兵庫教育大学教授	中村 浩一郎
講師	宮崎公立大学教授	福田 稔
講師	福岡工業大学教授	古川 武史
講師	甲南大学教授	中谷 健太郎

懇親会は今年度は開催しません

第2日 10月23日(日)

研究発表 (①10 時 ②10 時 40 分 ③11 時 20 分 ④12 時 ⑤12 時 40 分)

第4室 (202 教室)

司会 福岡大学准教授 渡部 智也

1. *A Tale of Two Cities* における見知らぬよそ者と無個性な集団——19 世紀英国の新しい読者層と匿名雑誌の関係性から

就実大学講師 原田 昂

-
- 司会 西南学院大学教授 加藤 洋介
2. *The Heart of the Matter* におけるスコビーの利己主義と利他主義の混在
九州大学大学院修士課程 長岡 有季
-

- 司会 久留米大学准教授 田中 優子
3. J. R. R. トールキンの命名法
福岡女学院大学短期大学部准教授 島居 佳江
-

- 【招待発表】 司会 熊本県立大学教授 虹林 慶
4. John Betjeman とバラッド詩の系譜
九州女子大学教授 中島 久代
-

- 司会 九州大学名誉教授 太田 一昭
5. John Donne の *Songs and Sonnets* における連想の織り成す物語——女性の不安を巡る恋人同士のやり取り
熊本県立大学大学院博士課程 鳥養 志乃
-

第5室 (204 教室)

- 司会 近畿大学准教授 青井 格
1. 演じる人々——Louisa May Alcott & Anna Bronson Alcott Pratt の戯曲 *Comic Tragedies* における自由への渴望
九州ルーテル学院大学講師 山本 幹樹
-

- 司会 琉球大学准教授 小林 正臣
2. 彷徨えるユダヤ人としてのポール・オースター ——自伝的二人称小説として読む『内面からの報告書』『冬の日誌』
九州大学大学院修士課程 新名主 優子

3. 【発表なし】
4. 【発表なし】
5. 【発表なし】
-

第6室 (304 教室)

- 司会 南山大学講師 林 慎将
1. Derivation of Restrictive Relative Clauses——in terms of extraposition and reconstruction
九州大学大学院修士課程 山本 天斗

2. 通言語的なヴォイスの意味変化と統語構造

司会 福岡大学教授 古賀 恵介

西南学院大学大学院修士課程 若芝 青

3. Copy Formation と外置構文

司会 九州大学准教授 前田 雅子

九州大学 准教授 大塚 知昇

弘前大学 講師 近藤 亮一

中部大学 助教 田中 祐太

東京理科大学 准教授 菅野 悟

4. 主格属格交替現象における属格付与メカニズム—C-licensing approach の立場から—

司会 九州大学教授 西岡 宣明

西南学院大学大学院修士課程 本白水 晴生

5. 【発表なし】

第7室 (303 教室)

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

3. 【発表なし】

4. 日本人英語学習者の英語音声産出における音節構造と母音持続時間

司会 琉球大学教授 石原 昌英

福岡大学大学院博士課程 石橋 頌仁

【招待発表】

5. 日本語受動文における A' 移動

司会 産業医科大学准教授 田中 公介

西南学院大学教授 藤本 滋之

特別講演 14 時 00 分より (チャペル)

司会 熊本県立大学教授 虹林 慶

東京大学教授 アルヴィー なほ子

“The lone and level sands stretch far away”——Shelley と帝国の夢

閉会式 15 時 30 分より (チャペル)

挨拶

西南学院大学教授 三宅 敦子

〈第1日〉10月22日(土)
研 究 発 表

第 1 室 (308 教室)

司会 北九州市立大学准教授 濱 奈々恵

1. Sewing up Separated Spheres: Charlotte Brontë's Vision of Feminist History in *Shirley*

九州大学大学院博士課程 Yin Yimeng

Charlotte Brontë's second published novel, *Shirley* (1849), is set in 1811. Taking a retrospective perspective, Brontë reflects on the history of women's emancipation and the ways in which women might attempt to enter the social sphere in a patriarchal society. In *Shirley*, women express different attitudes towards sewing, a traditional female activity, which is generally confined to the domestic space.

This presentation aims to explore the symbolic meanings of sewing in *Shirley*. This presentation will argue that through the women's responses to needlework, readers can see the awakening of a feminist consciousness, as the women attempt to gradually break down the boundaries between the two genders. Moreover, this presentation will reflect on Brontë's ideal in which she fulfills her duties in the domesticity and at the same time creates women's history as a female writer in the patriarchal society.

Ultimately, Charlotte Brontë's *Shirley* implies the awakening of a feminist consciousness, arguing that women can and should have it all; they should be able to enjoy a fulfilling domestic life and have the ability to enter society and to play a part in shaping their own destinies.

【招待発表】

司会 福岡女子大学教授 宮川 美佐子

2. 自伝的小説としての『チャンス』

長崎県立大学教授 岩清水 由美子

ジョウゼフ・コンラッドの後期小説『チャンス』では、フローラとアンソニー船長の突然の駆け落ちを軸に物語が展開する。語り手マーロウは、二人の駆け落ちについて第三者から聞いたことを伝えるだけでなく、自らさまざまな思いを巡らせているように、この小説では結婚と異性間の「愛」が作品の中心主題となっている。マーロウはフローラとアンソニー船長という異なる背景をもつ二人の結婚に至るプロセスについて、自らの想像力も交えながらその心理を辿っているが、フローラとアンソニーの人物像には、コンラッドと妻ジェシーを思わせるものがあり、突然の駆け落ち婚というプロットは、コンラッド自身の性急な結婚を思わせるものがある。駆け落ちから結婚に至る恋人たちの心理についてのマーロウの語りは説得的であり、コンラッド自身の突然の結婚と結婚生活を反映しているように思われる。本発表では、妻ジェシーの回想録やコンラッドの手紙などと比較しながら、『チャンス』が作者自身の経験が書き込まれた自伝的要素をもつ作品であることについて論じたい。

第 2 室 (302 教室)

【招待発表】

司会 鹿児島大学教授 竹内 勝徳

1. 「ブランチは女です。まず、女を舞台に出してください」 ——*A Streetcar Named Desire* 日本初演における杉村春子のジェンダー・パ フォーマンス

福岡大学准教授 坂井 隆

1953 年 3 月 19 日、大阪の毎日会館で Tennessee Williams の代表作 *A Streetcar Named Desire*(1947) が日本初演を迎えた。文学座の女優であった杉村春子がヒロイン Blanche DuBois を演じ、この公演以降、Blanche は杉村の十八番となった。杉村が回想録で述懐しているように、初演の演出を担当した川口一郎から稽古前の本読みの際、「ブランチは女です。まず、女を舞台に出してください。」と求められた。では、川口の指示に従って杉村は「女」としての Blanche をどのように演じたのであろうか。*Streetcar* 日本初演を記録した映像が現存しない今となつては杉村の演技を鑑賞することは不可能である。そこで本発表では、二次的資料を参照して、日本の近代現代演劇史の中で杉村が女優としての演技をどのように構築し、それを 53 年の公演でどのように応用したのかを検証してみたい。また、Williams がスタニスラフスキー・システムのアメリカ版である「メソッド」演技を念頭において *Streetcar* を書いた事実を考慮し、さらに「メソッド」のフェミニズム的再検証という昨今の学術的成果も導入して考察すめたい。

司会 九州国際大学教授 大園 弘

2. Truman Capote, *Other Voices, Other Rooms*, における境界線の解体 ——規範と分類の曖昧性

九州大学大学院修士課程 山口 沙瑛

Truman Capote の *Other Voices, Other Rooms* は、作家自身のホモセクシュアリティに着目して、主人公ジョエルのアイデンティティを構築する過程と Capote 自身のホモセクシュアリティに対する葛藤を重ねる読み方がされてきた。しかしセクシュアリティに限らず、身体や宗教、死生観、自然など社会を形作る様々な要素を一つの特異な観点に限定して読むことは、それぞれの要素の多様な解釈を制限してしまう可能性がある。また本作品にはそうした要素がアメリカ社会の規範から外れたものとして、グロテスクに描かれているが、それらを何らかの形で分類する基準は不明瞭である。そこで本論は人や風景のグロテスクな描写に着目して、セクシュアリティの在り方や身体、宗教、死生観、自然など様々な要素の社会規範からの逸脱やその判断基準の曖昧性を探る。社会における分類や対立構造の軸の曖昧性を読み取ることは、セクシュアリティの分野に限らず「ノーマル」であることを決定する社会や制度への抵抗を示すクィアの有効性へと繋がっていく。本発表ではホモセクシュアルな作家としてではなく、クィア作家としてのカポーティ研究の方向性を提示したい。

第 3 室 (304 教室)

司会 宮崎公立大学教授 福田 稔

1. 否定と A 移動の再構築

九州大学大学院博士課程 久保田 舞

Chomsky(1995)は、次のような例をもとに A 移動には再構築がないことを指摘した。

- (1) a. (It seems that) everyone isn't there yet. ($\forall \gg \neg, \neg \gg \forall$)
b. Everyone seems not to be there yet. ($\forall \gg \neg, *\neg \gg \forall$)

(Chomsky (1995: 327))

(1a)において every と否定のスコープには曖昧性が生じる一方で、(1b)において every が否定より狭いスコープをとることはできない。Chomsky(1995)は(1b)の事実を、A 移動には再構築がなく、主語 everyone は否定より低い元位置で解釈を受け取ることが出来ないためであると説明づけた。しかし、なぜそもそも(1a)のように同一 TP 内に every と否定が生じる場合、スコープに曖昧性が生じるのかということについては十分な説明づけがなされていない。

本発表では(1a)においてスコープの曖昧性が生じるメカニズムについて、スコープ解釈における否定の役割を探求し説明づけを試みる。具体的には(1a)において部分否定の解釈が得られるのは、否定繰り上げの結果ではなく、everyone が vP の指定部で解釈されるためであることを指摘し、(1a)におけるスコープの曖昧性こそが、A 移動の再構築の結果であると提案する。

司会 福岡工業大学教授 宗正 佳啓

2. 副詞効果考察

九州大学大学院博士課程 高場 清子

動詞句補部のthat節内からの目的語の抜き出しは補文標識thatの有無にかかわらず可能だが、主語の抜き出しはthatが非顕在的な場合のみ可能である。この現象(1)はthat痕跡効果と呼ばれる。

(1) That-trace Effect

a. What did he say (that) Laura bought?

b. What did he say (* that) bought *t* the rutabaga? (Perlmutter (1971:108))

Chomsky(2015)は、thatが顕在的な場合、一度Tに併合したwh主語は、埋め込み節のCPフェーズ指定部に移動することなく転送の段階までTP指定部に留まり続ける必要がある。一方で、thatが非顕在的な場合、that削除によりCのフェーズ性がTに継承され、転送領域がCの補部からTの補部となることにより、TP指定部のwh主語は転送を受けることなく、上位のフェーズにアクセス可能になると分析している。

しかし、副詞句の介在によりthat痕跡効果の非文法性を回復する(2)の副詞効果が存在する。Tenny (2000) はCinqueの副詞節の階層をsemantic featureに基づいて6層に分けているので、(2b)の文修飾の副詞(un)fortunatelyは最上層のCP領域でTP全体をscopeに取る

と考えられ、Chomsky(2015)の分析ではthatが顕在的なのにwh主語の抜き取りが可能な(2b)を説明できない。

(2) Adverb Effect

a. *Who do you think that *t* made no reply?

b. Who do you think that unfortunately *t* made no reply? (Frey (20003:196))

本発表では、*that* 痕跡効果と副詞効果における統語対象{wh, TP}のラベル決定やwh主語を含まない転送領域への変更を考察することによって、副詞の結合位置とその役割を検証したい。

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」(202 教室)

『ユリシイズ』の何がすごいのか——革命性とヒューマニズム

講師	熊本高等専門学校准教授	岩下	いずみ
講師	宮崎産業経営大学准教授	安井	誠
講師	熊本保健科学大学准教授	田中	恵理
司会・講師	宮崎大学准教授	新名	桂子

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の『ユリシイズ』 (*Ulysses*, 1922) の出版は衝撃であった。『ユリシイズ』は、一般的な意味で読み通すことすらできないほどの難物であり、文学や読書の概念を根底から変えてしまうほどのものだったのだ。この難解さゆえ、『ユリシイズ』のすごさと魅力进行分かりやすく説明するのはたやすいことではない。本シンポジウムでは、出版百周年を記念して、改めて『ユリシイズ』の何がすごいのかを考える。

各講師は、それぞれの関心にしたがって『ユリシイズ』のすごさと魅力进行説明するが、その際、二つのキーワード——革命性とヒューマニズム——を意識して議論を組み立てる。また、講師全員に共通の参照テキストとして、Kevin Birmingham, *The Most Dangerous Book: The Battle for James Joyce's Ulysses*, 2014 を使う。本書では、『ユリシイズ』という稀有な本がどのような苦難を経て出版されたか、『ユリシイズ』が文学のみならず世界をどのように変えたのかについて語られている。これを踏まえつつ、『ユリシイズ』の革命性とヒューマニズムに注目して、『ユリシイズ』がどんなに面白くてすごい文学であるか、そして、世界をどのように変革したのかということ进行フロアの皆様と共に語り合う場としたい。

『ユリシイズ』のユグノー表象に見る移民像 ——ジョイスが種を蒔いた共同体の未来

岩下 いずみ

『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルーム (Leopold Bloom) はユダヤ人としてダブリンの共同体で疎外されるため、彼のユダヤ性に着眼した先行研究は数多い。この発表では、ユダヤ人を含む移民というより広い観点から、これまで取り上げられてこなかったユグノー表象を検討する。ユダヤ人として差別されるブルームをジョイスが描いた根底には、異質な存在こそが共同体の未来に必要な不可欠であるという主張があったと思われる。ユグノーもダブリンにおいては異質な存在だが、ユダヤとは受容が異なっており、ユグノー表象をユダヤ表象とも合わせて検討することで、移民、共同体のあり方と未来が見えてくるだろう。これらの移民表象は、いわばジョイスが蒔いた種のようなものであり、作品執筆当時にジョイスが意図しえなかったであろうユグノー表象にある種が、『ユリシーズ』出版 100 年後、移民・難民問題が大きく取り上げられている現在、芽を出している状況であるのかもしれない。

“the new womanly man” としてのブルーム ——ブルームの「生きづらさ」の再解釈

安井 誠

『ユリシーズ』が出版されて 100 年の月日が経つが、今でも世界中の読者の心を掴んで離さないのは、その物語が持つ普遍性にあるのではないだろうか。一方で、ジェンダー理論に関する研究が進む中、ブルームの持つ多様で複雑なアイデンティティについてはこれまでも様々な解釈がなされている。ブルームはこの日、家の中にあってはシャドウワーカーのように妻の世話に勤しむものの、労りの言葉もかけられない。家の外にあっては多数の男性と交流するものの、良好な関係を築くような親しい友人も見当たらない。それらの謎を解く一つの可能性として、ブルームの男性としての生きづらさが要因として挙げられるのではないだろうか。本シンポジウムではブルームの思考や行動について見つめ直し、“the new womanly man” (U15. 1798) としてのブルームのジェンダーアイデンティティの再解釈を試みたい。そして当時ジョイスが目指していたヒューマニズムとはどういうものだったのか、100 年という時空を経てその先験的な発想について再確認したい。

モリーの独白における身体表象の書き換え

田中 恵理

1933 年ジョン・ウルジー (John Woolsey) 判事によって『ユリシーズ』は猥褻な作品でないとの判決が下された。だが、*The Most Dangerous Book: The Battle for James Joyce's Ulysses* で記されているように、ウルジーは第 18 挿話のモリー・ブルーム (Molly Bloom) の独白には最後まで懐疑的だったという (326)。現代において、第 18 挿話における身体や性の表現は問題にならないが、その理由として単に裁判の判決や時代の変化、世間の評価を挙げるのは短絡的であろう。フィジカルカルチャーや社会浄化運動が盛んだった当時、ジョイスが何を意図して身体的・性的に大胆な描写をモリーの独白で行ったのかを理解してこそ、本挿話が持つ内在的な芸術的力、ひいては『ユリシーズ』

の革命性を理解できる。そこで、本発表では、第18挿話モリーの独白における女性の身体描写に注目し、それがヴィクトリア朝小説やポルノグラフィが描く女性の身体表象を書き換えた革命性を担っていること、また女性の身体を描くことを通して女性の声に耳を傾けようとするジョイスのヒューマニズムも備えていることを示す。

ジョイスから女たちへ愛をこめて ——『ユリシーズ』におけるパロディによる革命と女性讃歌

新名 桂子

「母は父の虐待と、長年の苦勞と、ぼくの冷笑的な露骨な振る舞いによってゆっくりと殺されたと思います。……ぼくは母を犠牲者にした体制を呪いました」(Richard Ellmann, editor. *Letters of James Joyce*, vol. II, 1966, p. 48) ——ジョイスが生涯の伴侶ノラ・バーナクル(Nora Barnacle)に出逢って二ヶ月半ほどたった頃書いたこの有名な手紙の一節は、作家のある側面を鮮やかに伝えており、『ユリシーズ』を読む時、大きな示唆を与えてくれる。本発表では、革命性の観点からは、『ユリシーズ』が、19世紀の抑圧的な時代精神(支配的イデオロギー)を体現した物語をパロディによって破壊することにより革命を起こしていること、また、ヒューマニズムの観点からは、同書がジョイスからノラへの想いのこもったラブレターであると同時に、15回もの妊娠と出産の果てに44歳の若さで亡くなった母親への鎮魂歌でもあることを論じる。

第2部門「アメリカ文学」(204教室)

戦争に周縁はあるのか?

司会	九州大学准教授	高野	泰志
講師	九州大学助教	永川	とも子
講師	福岡県立大学教授	田吹	香子
講師	明治大学准教授	山本	洋平

ロシアのウクライナ侵攻に限らず、我々はこれまで無数の戦争の惨禍をメディアを通して目撃してきた。それらの報道や証言、あるいはそれらにもとづくフィクションを目にしながら、我々は無意識のうちに戦争を語れるのは「当事者」だけであるという前提を、あるいは「当事者」の語りが最も信頼に足る証言であるという前提を、抱いているのではないだろうか。しかし実際には「当事者」には語ることをできないこともあれば、逆に「非当事者」にしか語れないものもあるはずである。「当事者」と「非当事者」を分け隔てる思考には、戦争言説を、語る主体によって階層化しようとする力が働いており、語る資格がないとされた者の語りは周縁に追いやられ、黙殺されてきたのである。

一方でアメリカ文学においては「非当事者」とされる人々による戦争の語りが数多くみられる。その中でも南北戦争当時には生まれてもいなかったスティーヴン・クレ

インの『赤い武功章』は高く評価されているにもかかわらず、イーディス・ウォートンやウィラ・キャザーなどの女性作家が描いた戦争小説は文学市場からほぼ抹殺されてきたと言っても過言ではない。では戦争を語ることを許された者、戦争を語る資格を有するものとは誰なのか？ 周縁に追いやられた「非当事者」の言説はこのまま黙殺されてよいのか？ そもそも戦争に「非当事者」は存在するのか？ 本シンポジウムはこういった戦争と語りの問題を、20 世紀アメリカ文学の中から多様な作家・作品を扱いながら問いかけたい。

Rereading 1922

ーウィラ・キャザーと終わりのなき戦争

山本 洋平

第一次大戦を舞台とする 1922 年の小説 *One of Ours* は、ピューリッツァ賞授与も相まって、Willa Cather の作家としての地位を不動のものとしたが、同時に、Michael North が 1999 年の研究書 *Reading 1922: A Return to the Scene of the Modern* で詳述した通り、本作の戦争描写は、Edmund Wilson や Hemingway らによって酷評された。これらの同時代評が露わにしたのは、実際に戦地を経験していない女性作家による戦争描写に対して、男性作家たちがきわめて強い嫌悪感を示したという事実である。そこで本発表では、戦争を語ることができるのは誰なのかという問いを念頭におきつつ、キャザーのテキストが男性批評家たちから寄せられた厳しい批判を凌駕するだけの強度を有しているかを検証する。この考察を通じて、「1922 年」を画期と位置づけるキャザーの有名な言葉（“The world broke in two in 1922 or thereabouts”）の理解も深められることになるだろう。

ヒロシマ・ナガサキを語り得るのは誰なのか ー欧米圏の核表象空間と「被爆証言文学」

永川 とも子

早くは 20 世紀初頭より、欧米圏の言語空間において核/原爆が表象される際、体系化することがほぼ不可能と思われるほど途方もない数の文学作品が世に送り出されてきた。こうした作品は核使用の是非を巡る論議や終末論を焦点化したものが顕著であり、「被爆者の証言」は周縁化されてきたと言える。

しかし、被爆者の物語は全く語られてこなかったというわけではない。実際は 1980 年代を主たる起点として現在にいたるまで、一定数の被爆証言文学が登場していることも事実だ。こうした作品群の類型パターンとしては、被爆証言に依拠し、体験していない者が聞き語りをするという、いわば「記憶の記録」というスタイルをとっている点が挙げられる。

チャールズ・ペレグリーノの *To Hell and Back* の場合もこの類型を踏襲していると考えられるが、特筆すべきは 2011 年の初版において、作中登場人物の証言の真正性に嫌疑がかかり、発禁処分となったものの、2015 年に校正版が再出版された経緯を持つという点だ。この「語り直し」は、できる限り「不確かな」情報をトリミングすることで「真実」に近づこうとする試みと解することもできよう。しかし裏を返せば、証言の

真正性に対する無条件の信頼を意味してもおり、戦争は「体験した者」しか語り得ないという幻想を補強してもいるのではないか。本発表では、証言への絶対的な依拠が内包する問題を顕在化し、「欧米圏の原爆の語り」という枠組みにおいて周縁化されがちであった被爆体験記の位置を問い直す試みである。

戦争は「何の顔」をしているのか —Northern Lights における「女性の声」の役割を考える

田吹 香子

世界終末時計の針は再び「深夜」へと動き出した。*Bulletin of the Atomic Scientists* は 2022 年 3 月、ロシアのウクライナ侵攻を受け、世界の終わりまで残された時間は 100 秒だとしたのだ。これは新しい冷戦なのか、はたまた冷戦は終わっていなかったのか。

Tim O'Brien の長編小説 *Northern Lights* (1975) においても主人公 Paul Milton Perry の弟 Harvey のベトナム戦争従軍の事実やキューバ危機の思い出が描かれ、当時の冷戦の緊張がほのめかされる。だが、Paul の意識は代々続く「父と息子」の関係や男らしさに抱く個人的なコンプレックスに集中し、彼の物語とその緊張の時代の様子はうまくかみ合わない。一方で、各所に現れる「女性の長いおしゃべり」はこの物語に妙な「ゆがみ」を生じさせ、その意義はなにかと読者に問いかける。

本シンポジウムではこの Paul の物語に埋め込まれた、一見何でもないようなこの「女性の声」に着目し、「戦争に関与する主体」とは誰なのかという点を考察したい。

第 3 部門「英語学」(303 教室)

統語論と言語学関連分野とのインターフェイス

司会・講師	兵庫教育大学教授	中村 浩一郎
講師	宮崎公立大学教授	福田 稔
講師	福岡工業大学教授	古川 武史
講師	甲南大学教授	中谷 健太郎

統語論と言語学関連分野とのインターフェイス

中村 浩一郎

統語論は構造構築だけを扱い、自律性がある、あるいは自律性を保つべきであるとの考えがある一方で、統語論あるいは統語部門は音韻、意味、語用、言語運用、情報構造など、関連する言語学の諸研究分野と綿密な関係を持つとの考えもある。本シンポジウムでは、後者の考えに基づき、統語論と関連分野とのインターフェイス、すなわち相互作用という統一テーマのもとで、統語論と(1)意味解釈、(2)言語運用理論、(3)情報構造との相互作用・相互関係について、最新の研究成果も踏まえて探求する。

具体的には、福田講師・古川講師が多重主語構文における統語構造と意味解釈の相

互関係を論じる。多重主語については久野(1973)以来、素性継承、カートグラフィーなど様々な枠組みでの分析がなされている。本発表では、終助詞、格助詞脱落、ポーズ(休止)、後置という統語的あるいは音韻的観点も踏まえ統語構造と意味解釈とのインターフェイスの観点から分析を行う。中谷講師は Chomsky (1995)以来論じられている、言語能力が供給するとされる2つの「インターフェイス・レベル」(PF, LF)における指示(instruction)」の働きを分析し、どのように働くのかを、実験心理言語学の成果を紹介しつつ議論する。中村はカートグラフィーの枠組みで主題要素の種類を整理した上で、それらの生起順に関する階層をイタリア語、ドイツ語、中国語、日本語、ハンガリー語、更には英語のデータを元に分析し、その生起順が情報構造に及ぼす影響について分析する。

3つの講演で統語部門と意味解釈、言語運用、情報構造との相互作用・相互関係を詳細に議論することにより、統語論研究に対する何らかの示唆を与えることを目指す。

統語構造と意味解釈のインターフェイス—多重主語構文を巡って

古川 武史

日本語の多重主語構文は、さまざまな観点から分析されてきた。多重主語の意味解釈(久野(1973)の総記解釈・中立叙述)と統語構造に着目した分析として、Miyagawa (2010)の素性継承を援用した西岡(2013, 2018)や、Rizzi (1997)のカートグラフィーを仮定した Yamada (2013)の分析がある。また、Saito (2021)は Chomsky (2013, 2015)のラベル理論で多重主語構文を分析している。最近では、Ishii and Goto (2021)が Chomsky (2021)の Form Sequence による分析を行い、多重主語間には階層の差異がないと論じている。本発表では、終助詞、格助詞脱落、ポーズ(休止)、後置といった観点から多重主語構文を再検討し、研究の方向性として Miyagawa (2022)と西岡(2018, 2022)を支持する。

統語構造と言語運用のインターフェイス

中谷 健太郎

ヒトの言語の心的メカニズムとして、「言語能力」(あるいは「言語知識」と「言語運用」の区別を説いたのはチョムスキーであり、前者は後者のための基盤を提供するとされた(Chomsky (1965))。このモデルはその後半世紀以上に渡って生成文法理論の基盤となっており、言語能力は聴音-知覚と概念-意図の2つの「インターフェイス・レベル」(PF, LF)において「指示(instruction)」を供給するとされる(Chomsky (1995))。しかし実時間軸に沿って行われる実際の運用に際して、この「指示」がどのように働くのかという問題については、特に理論言語学研究の側においては先送りされ続けているようである。本発表では言語運用の観点から言語知識の問題を再考することの重要性を、50年に渡る実験心理言語学の成果の一部を紹介しつつ議論する。

主題要素の種類とその語順を巡って ——カートグラフィーと情報構造のインターフェイス

中村 浩一郎

イタリア語、ドイツ語、更には中国語の分析を通して、主題要素の 1 文における生起する語順が厳密に定まっているとの主張がなされている。Frascarelli and Hinterhölzl (2007:112)は以下のような主題階層を提示している。[ShiftP[+aboutness] [ContrP [FocP [FamP* {continuing; familiar} [IP。すなわち、主題要素は Aboutness Topic>Contrastive Topic>Focus>Familiar Topic と言う厳密に定まった語順で生じ、更に、Familiar Topic のみ複数生じうるとの主張をしている。同様に、中国語でも主題要素の語順が定まっているとの主張が見られる。Badan and del Gobbo (2010:87))は以下の階層を提示する。Aboutness Topic>Hanging Topic (HT)>Left-dislocated Elements(LD)>lian Focus>IP。本発表では、これらの主張に対する反論を日本語、ハンガリー語、更には英語のデータを通して提示した Nakamura(to appear)の主張を発展させ、主題要素が厳密な語順で生起することに対する反論を提示する。更には、様々な主題要素が提示されていることを踏まえ、主題要素の定義を明確にし、それらの生起順を詳細に議論し、焦点要素との関連も踏まえ、それらの語順について分析する。

〈第 2 日〉10 月 23 日 (日)

研 究 発 表

第 4 室 (202 教室)

司会 福岡大学准教授 渡部 智也

1. *A Tale of Two Cities* における見知らぬよそ者と無個性な集団 ——19 世紀英国の新しい読者層と匿名雑誌の関係性から

就実大学講師 原田 昂

本発表は、Charles Dickens による長編小説 *A Tale of Two Cities* で描かれる 18 世紀仏国に見られる匿名性が、現実世界における 19 世紀英国の出版界に見られる匿名性と合致することを示すものである。19 世紀英国では、正体不明の新しい読者層が登場した。彼らは、Dickens が発行する雑誌との関係性の中で認識可能な輪郭を与えられた。彼の雑誌上では編集者 Dickens 以外は匿名であったため、編集者の意図を考慮するだけでこの雑誌の読者が何者かを規定することができたからだ。同様に、Dickens の雑誌上で連載された *A Tale of Two Cities* では、度々見知らぬよそ者が現れる。彼らは、擬似的に Jacques という 1 つの人格に統合された集団との関係性の中で認識可能な存在となる。このように本作品は、現実世界でその掲載誌の周辺で起きていた現象を、匿名性の機能という点から描き出している。

2. *The Heart of the Matter* におけるスコビーの利己主義と利他主義の混在

九州大学大学院修士課程 長岡 有季

Graham Greene による *The Heart of the Matter* において主人公のスコビーは妻のルイズや愛人のヘレンなどの周囲の人々に憐れみを抱き、常に彼らの幸せに対する責任感を感じている。他者のことを最優先に考えて生きているスコビーは利他主義者のように見えるが、彼の責任感が独りよがりなものであり、彼の言動は利己主義に基づいていると解釈できる部分が存在する。

本発表では、スコビーの言動を利他主義・利己主義の観点から分析する。そしてスコビーの特徴である「問題からの逃避」と「独りよがりな責任感」の2点を取り上げ彼の言動が利己主義である可能性を論じる。最終的にスコビーは自殺をするのであるが、それはルイズやヘレンのためではなく問題解決からの究極の逃避であり自らが抱いた責任感の重さが招いた結果だと解釈でき、彼の利己主義が及ぼした自殺への影響についても考察していく。

司会 久留米大学准教授 田中 優子

3. J. R. R. トールキンの命名法

福岡女学院大学短期大学部准教授 島居 佳江

トールキン (J. R. R. Tolkien) の命名法は彼自身の趣味、嗜好と相まって非常に特徴的である。トールキンにとっては名前を考えることが第一義で、物語の創作はそれら名前や他の創造言語に活躍の場を与えるにすぎなかった。そのようなトールキンが敢えて名前を与えていない登場人物がいる。1967年に発表されたトールキン存命中最後の出版である『星を飲んだかじや』(*Smith of Wootton Major*) の主人公はかじや (Smith) であり、一般名詞が固有名詞として名前に使われている。伝記作家カーペンターによると、トールキンは George MacDonald の *The Golden Key* の序文を書くように依頼され、珍しく引き受けた。しかし、マクドナルドの著作の多くはトールキンからすれば、道徳的な寓意性によって損なわれていると思われた。トールキンはそこで、マクドナルドの読者に対して、「妖精」という語の意味を説明することから始め、その説明のための物語が『星を飲んだかじや』だったのだ (244)。本論では、トールキンが自分の十八番を封印し、それによって執着を手放そうとした軌跡を検証したい。

【招待発表】

司会 熊本県立大学教授 虹林 慶

4. John Betjeman とバラッド詩の系譜

九州女子大学教授 中島 久代

John Betjeman は 20 世紀の一連のモダニズム運動に与せず、イングランドの町々、同

時代、人と社会を‘serious light verse’と呼ばれるタッチで描写した。そのため偏屈で視野の狭い詩人だと評される一方で、Philip Larkin は、風土、死、恋愛などの極めて親しみやすい題材によってベッチマンは人と社会への尽きない興味を詩に表現し、さらに荘厳さと滑稽さの間に揺れ動く人と社会の本質を表現したと称賛する。現代詩のコンテキストにおけるベッチマンは矛盾であっても、18 世紀以降現代まで脈々と続く「バラッド詩の系譜」に彼を置けば、バラッドというジャンルが継承して来た、物語性と客観的視点、アイロニーとユーモア、風刺性、パロディ精神、自己戯画化といったエートスは、全てベッチマンに継承されていることが明らかである。本発表では、ベッチマンの作品のバラッドのエートスを分析し、ベッチマンの「バラッド詩の系譜」における位置付けを試みる。

司会 九州大学名誉教授 太田 一昭

5. John Donne の *Songs and Sonnets* における連想の織り成す物語 ——女性の不安を巡る恋人同士のやり取り

熊本県立大学大学院博士課程 鳥養 志乃

John Donne の *Songs and Sonnets* は現在掲載順序が確定していない詩群である。しかし本 *Songs and Sonnets* 研究ではこの詩群の作品同士が連想ゲームのように繋がっているという主張の元、ジャンル全体で円環を成す独自の順番を提示する。本発表では本 *Songs and Sonnets* 研究の一部として、“Woman’s Constancy”、“The Good-Morrow”、“The Sun Rising”、“Break of Day”、“The Dream”、“Song: Sweetest Love”、“Witchcraft by a Picture”、“A Valediction: of Weeping”、“A Valediction Forbidding Mourning”、“A Valediction: of the Book”を扱う。そしてこれらの作品間における「来朝と心変わり」、「全世界と匹敵する恋人達」、「超人的な目力の彼女」、「彼女の嘆き」、「彼女の文才」と言った要素や細かなレトリックに着目して読むことで、「自分達が遊びでないかと心配する女性に対し、男性は二人で迎えた朝を壮大な比喻で賞賛するが、女性は彼が仕事で離れることを恨む。男性はレトリックを変えながら別れ際に泣かれては辛いからと恋人に泣き止むように何度も説得し、航海に出た自分を手紙で励ましてくれと頼む」という恋人達の物語を提示する。

第 5 室 (204 教室)

司会 近畿大学准教授 青井 格

1. 演じる人々——Louisa May Alcott & Anna Bronson Alcott Pratt の 戯曲 *Comic Tragedies* における自由への渴望

九州ルーテル学院大学講師 山本 幹樹

Louisa May Alcott の自伝的小説である *Little Women* (1868, 69) には劇中劇が描かれている。*Little Women* は大成功をおさめたが、Alcott の死後、戯曲 6 編が *Comic Tragedies* の表題で姉の Ann との共作として出版された (1893)。副題には“Written by ‘Jo’ and ‘Meg’ and Acted by the Little Women”とある。

戯曲には共通した二つの特徴がある。1つは、特定の役割、例えば、仮面を被る人、あるいは変装をする人、魔女が登場する。それぞれの作品において時には男性が仮面を被り、また、時には女性に変装し身分を偽る。魔女はしばしば好きな時間に好きなように現れ人々の心を揺さぶる。人々の感情や行動を操作しようとするのである。

2つ目は、「自由」を表すキーワード(“free”, “liberty”など)が登場人物から発せられることである。人々の求める自由とは何か、自由を獲得するために何を行うのか、という点に焦点を当てると、他者を演じることと「自由」との関連性が見えてくるように思われる。

本発表では、戯曲においてどのような人々がどのような場面で他者を装うのか、その結果何が起こるのか、また「自由」との関連性とは何かについて、6つの作品を包括的に考察したいと考える。

司会 琉球大学准教授 小林 正臣

2. 彷徨えるユダヤ人としてのポール・オースター ——自伝的二人称小説として読む『内面からの報告書』『冬の日誌』

九州大学大学院修士課程 新名主 優子

ポール・オースターは『全詩集』に編まれた詩「創作ノートの覚書」において「世界は私の頭の中にある。私の肉体は世界のなかにある」と書いた。存在と言語、空間と観念、身体と精神の対立を描きつつその境界の曖昧性を描くことは彼の多くの作品に共通するが『内面からの報告書』と『冬の日誌』はまさに身体と精神その両面から描かれたものである。本作はオースターの人生観や作品観を色濃く描写しているが先行する研究は少ない。それは本作がノンフィクションという枠に括られるためだろ

う。本論ではこの二作品を身体と精神で対を為す自伝的二人称小説として解釈し、両作品、ひいてはオースターの作品群に新たな読み方を提示する。その上で重要になるのがオースターの「ユダヤ性」である。本論では第一に「歩き回る」イメージ、第二に「名辞」の観点からこの「ユダヤ性」を探りたい。また特に経験と観念にまたがる「死がどのように書き分けられているかに着目する。

3. 【発表なし】

4. 【発表なし】

5. 【発表なし】

第 6 室 (304 教室)

司会 南山大学講師 林 慎将

1. Derivation of Restrictive Relative Clauses ——in terms of extraposition and reconstruction

九州大学大学院修士課程 山本 天斗

本発表は制限関係節(Restrictive Relative Clause: RRC)の派生を外置現象及び再構築効果の観点から考察する。

Cinque (2015)や Hulsey and Sauerland (2006)などの研究において、RRC の外置は先行詞(Relative Head: RH)の再構築効果を妨げることが観察された。Hulsey and Sauerland (2006)や Sportiche (2016)では、RH を関係節内から移動させる Raising によって派生される RRC は外置位置に派生することができないことを説明している。一方でこれらの研究では、RRC が外置可能な派生方法を提案する際に、理論的にも経験的にも問題のある想定を行っている。

本発表では、上記の先行研究における問題点を指摘した上で、Chomsky (2021)の Form Copy を用いた新たな提案を行う。ここでの提案は、関係節の内側と外側にそれぞれ独立して生起する RH が解釈部門で一致することで RRC を派生すると考える Matching Analysis に原理的な説明を与える。更に、Hulsey and Sauerland (2006)に従い、RRC は Raising と Matching の二通りの派生方法があるが、外置される RRC は Matching によってのみ派生可能であることを導出する。

司会 福岡大学教授 古賀 恵介

2. 通言語的なヴォイスの意味変化と統語構造

西南学院大学大学院修士課程 若芝 青

本発表では、ヨーロッパ諸言語における Voice syncretism と呼ばれる現象をみて、その言語間変異と意味変化に統語的な説明を与えることを試みる。

Voice syncretism とは、ある 1 つの形式に対して複数のヴォイスにかかわる意味が対応する現象である。ヨーロッパ諸言語において、再帰代名詞を含む構文が様々な意味をもつ構文へと派生していったことが知られている。また、これらの変化は、通言語的にみて、再帰 > 反使役 > 受身 > 非人称の方向に変化していったとされており、再帰代名詞を含む構文がどこまでの意味をカバーするのかについて言語間で違いがある。例えば、英語では再帰の意味のみを表すが、ドイツ語では反使役までを、スペイン語では非人称の意味までを表し得る。

これら諸構文がどのような過程を経て発展を遂げたのかについては、主に意味的な観点からの説明が多くなされてきた。本発表では、主にスペイン語、ドイツ語、英語を中心として、上記のような再帰形における Voice Syncretism と言語間変異、意味変化に統語的な説明を与えることを試みる。

3. Copy Formation と外置構文

九州大学准教授 大塚 知昇

弘前大学講師 近藤 亮一

中部大学助教 田中 祐太

東京理科大学准教授 菅野 悟

本発表の目的は、Copy Formation (Chomsky (2021))と pro を用いた大塚 (2021)の提案の下で、2種類の外置構文の性質 (e.g. Napoli (1988), Kondo (2015))に対して新しい分析を与えることである。本発表では、大塚 (2021)では議論されなかった、「pro が上位にあり、先行詞が下位にある」階層構造に焦点をあてる。また、Copy Formation と Labeling は同時に進行すると想定し、pro が Labeling に参与した後に、特定の条件下では先行詞と Copy Formation 関係を構築すると提案する。このような pro は虚辞 it として具現化すると想定する。2種類の外置構文において that 節の範疇が異なっており、その違いにより、it として具現化する pro が that 節と Copy Formation 関係になるか否かが異なると主張する。以上の分析により、2種類の外置構文や文主語構文の諸特徴が捉えられることを示す。

司会 九州大学教授 西岡 宣明

4. 主格属格交替現象における属格付与メカニズム —C-licensing approach の立場から—

西南学院大学大学院修士課程 本白水 晴生

本発表は、補文内の主語が属格と主格の両方で表示可能な「主格属格交替」と呼ばれる現象を取り上げる。特に、補文主語への属格付与メカニズム解明を目標とする。

主な議論として、まず(1)のような所有格要素が共起する場合において、主節 D 主要部が属格主語の格付与子であるとする D-licensing approach ではうまく説明ができないことを指摘する。

(1) [今朝 次郎が/の 作った] 太郎の 弁当

そして、上記の例は C 主要部が属格主語の格付与子であるとする C-licensing approach をサポートする新たな証拠となることを主張する。

次に、C 主要部が属格の格付与子として振舞える理由についても考察を展開する。具体的には、上代日本語の統語構造に着目し、当時の C 主要部は主格のノ格を主語に付与する能力を持っていたことから、現代日本語においても C 主要部を属格付与子とすることが通時的に支持されることを明らかにする。

5. 【発表なし】

第 7 室 (303 教室)

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

3. 【発表なし】

司会 琉球大学教授 石原 昌英

4. 日本人英語学習者の英語音声産出における音節構造と母音持続時間

福岡大学大学院博士課程 石橋 頌仁

世界の多くの言語において、音節構造によって母音持続時間は変化することが報告されている。石橋 (2022) は英語を母語とする話者に対して音声産出実験を行い、音節内の頭子音が増えるにつれて母音持続時間は長くなることを指摘した。母音持続時間と日本人英語学習者の英語習熟度の関係について、小西 他 (2016) は、英語習熟度の高い話者ほど母音持続時間の時間制御が英語母語話者の特徴に近づいていくことを報告した。しかしながら、長井 (2018) において行われた実験では、英語習熟度と母音持続時間の間には高い相関関係は観察されなかったことを報告している。この結果を踏まえ、本研究では日本人英語学習者に対して、頭子音の増加と母音持続時間の関係が英語の習熟度に影響されるのかどうかを明らかにすることを目的として、音声産出実験を行った。その結果、習熟度の高さに関わらず、頭子音が増えるほど母音持続時間は伸びるという傾向が観察された。

【招待発表】

司会 産業医科大学准教授 田中 公介

5. 日本語受動文における A' 移動

西南学院大学教授 藤本 滋之

あらゆる構文の基底構造が、UTAH (Baker 1988) と主題役の階層構造 (動作主 > 場所 > 存在物 cf. Kaga 2007) によって決まると仮定すると、受動文は対応する能動文から派生することになるが、階層が下位の場所役や存在物役を担う DP が動作主役を担う DP を越えるとき、最小性原理違反を起こすことになる。これを回避するため提案されたのが *smuggling* (Collins 2005) であるが、SOV 語順の日本語では英語におけるような分詞句による「密輸」を使えない。本発表では、日本語の受動文は空演算子の A' 移動によって派生する叙述文の構造になっており、Hicks (2009) による英語 *tough* 構文の分析におけるのと同様、空範疇が *smuggler* として機能していることを主張する。A' 移動の根拠として、①長距離移動、②寄生空所認可、③島の効果、④目的語以外からの移動、⑤叙述関係の適切性条件、⑥コピュラ明示による容認度上昇に注目し、日本語 *tough* 構文と共有する特性 (cf. 中川 1997) にも触れる。

特 別 講 演 (チャペル)

司会 熊本県立大学教授 虹林 慶

演題 “The lone and level sands stretch far away”——Shelley と帝国の夢

講師 東京大学教授 アルヴィ なほ子 (アルヴィ なほこ)

講演内容

2022 年は、Percy Bysshe Shelley の没後 200 周年記念の年にあたる。イギリス、イタリア、アメリカの学会が共同で行った Shelley 200 のプロジェクトでは、14 か国語で “The Triumph of Life” が朗読され、Shelley 研究が一つの言語や地域で閉じないことが示された。

本講演では、2022 年が Shelley 研究のグローバル化の年であると同時に、世界が「帝国」(“imperium sine fine dedi”= empire without boundaries[*Aeneid* 1.279])の夢を追うロシアのウクライナ侵攻でかき乱されている年でもあることをふまえて、Shelley の代表的な作品の中に現れる「帝国」(と他言語)を検討する。“Zeinab and Kathema,” *Queen Mab*, “Alastor,” “Ozymandias,” *Prometheus Unbound*, 最後の未完の“The Triumph of Life”を扱うが、“Ozymandias”を中心として考察する。

講師紹介

1961 年東京生まれ。東京大学大学院博士課程を経て、トロント大学博士課程修了 (Ph.D in English)。東京大学助手、千葉大学助教授、東京大学総合文化研究科准教授を経て、現在、同研究科教授。専門は英文学、イギリス・ロマン主義研究。これまで日本英文学会編集委員、日本英文学会関東支部理事を務めている。

単書として *Strange Truths in Undiscovered Lands: Shelley's Poetic Development and Romantic Geography* (U of Toronto P, 2009, pbk. 2020 福原賞)、編訳書として『対訳シェリー詩集』(2013, 岩波文庫)、主要論文として「風に助けられることなく一会話詩の静かな革命」(『コウルリッジのロマン主義』[2020, 東京大学出版会]所収) などがある。